

咬合育成を行った一症例

○森 奈千子

医療法人社団天昌会 森歯科小児歯科医院

【緒言】 日常の歯科診療の中で、成長期にある小児の不正咬合に対する対応は、患者の状況や保護者の関心、さらには患児の協力により、対処が異なってくる。今回、咬合育成の観点から14年間にわたり、治療・観察を行った症例を報告する。

【症例】 初診；1994年7月21日、8歳女児。主訴；前歯の反対噛みが気になる。家族歴；母親が切端咬合であるほかは、特記事項なし。

習癖；特になし。

前歯はクロスバイトで、オーバーバイト5mm。顔貌はストレートタイプ。下顎には永久歯の萌出スペースの不足が予想された。

【治療経過】 下顎にはスペース確保のために、床装置を使用し、上顎は舌側弧線と補助弾線を用い、前方拡大を行い、クロスバイトを改善した。成人に至るまで観察したが、顔貌にⅢ級傾向が見られるものの不正咬合は改善された状態を維持している。

【考察】 成長期にある小児の前歯部不正咬合については、保護者の関心が高く、相談を受けることも多い。特に、Ⅲ級不正咬合では、治療期間が長期にわたることも多いが、患児の成長期に良いタイミングで適切な治療を行うことで、患児に与える負担も少なく、良好な結果が得られた。